

ダンフリースでのロバート・バーンズと女性たち
Robert Burns and Some Women in Dumfries

寺西 範恭

成蹊大学一般研究報告 第47巻第1分冊

平成25年1月

BULLETIN OF SEIKEI UNIVERSITY, Vol. 47 No. 1

January, 2013

ダンフリースでのロバート・バーンズと女性たち

Robert Burns and Some Women in Dumfries

寺西 範恭

Noriyasu TERANISHI

はじめに

1791年11月11日、バーンズ一家はエリスランド (Ellisland) からダンフリース (Dumfries) のウィー・ヴェンル小路 (Wee Vennel)、現在のバンク通り (Bank Street) 二番地に引っ越してきた。今でいうところの3DKのフラットで階下にはジョン・サイム (John Syme) が数か月前に引っ越しを終え事務所を構えていた。その後彼はバーンズの終生変わらぬ友となる。サイムはバーンズよりも数歳年上であった。バーンズの妻ジーン (Jean) はエリスランドよりもこの町の方が暮らしやすいと考えていたようだ。¹

ダンフリースは当時の人口が五千人を少し超えるほどの小規模な町であったが、活気に満ち賑やかであった。バーンズは居を移す以前にも度々この町を訪れていた。最初の訪問は1787年6月4日で、その日、ダンフリース町議会より名誉町民に選ばれていたバーンズは、自ら赴き正式に手続きを行った。ダンフリース町議会がバーンズに手渡したと思われる証書が、1859年にエディンバラの音楽堂の展示物の中から発見された。そこには、当該日バーンズが「当町の名誉町民として全ての特権と特典を一般町民同様存分に自由に享受する、しても差し支えない、し得る権利が認められた」とある。この「特権と特典」が経済的に不遇であったバーンズの目を引いた。その一つが、ダンフリース名誉町民の子息は10スコットランドマーク (旧貨幣制度の690ペンス相当) で公教育を受けることができるというものであった。通常ならば80スコットランドポンド (旧貨幣制度の1600ペンス相当) になるので、この特典を利用すれば教育費がおよそ4割引きになる。1793年、バーンズの息子たちにこの特典が適用された。²

バーンズ一家にとって、ダンフリースは当初楽天地に見えた。バーンズ終焉の地になるとは思ってもみなかったことであろう。人の一生の区分けでいえば「晩年」を過ごすことになるバーンズは、健康への不安をますます募らせながらも相変わらず恋と詩作に精力的であり続けた。小稿ではダンフリース時代の女性関係を見ながら、バーンズ晩年

1 Patrick Scott Hogg, *Robert Burns: The Patriot Bard* (Edinburgh: Mainstream Publishing, 2008) 234.

2 Maurice Lindsay, *The Burns Encyclopedia* (1959; London: Robert Hale, 1980) 112.

の作品と背景を探り、詩想の変化を裏付けたい。

1. アンナ

バーンズの恋の歌の中でも最高傑作とされる「昨晚おれは酒を一杯飲んだ」(*Yestreen I Had a Pint o' Wine*) に登場するのが、ヘレン・アン・パーク (Helen Anne Park)、通称アンナ (Anna) である。彼女は、ダンフリース大通りに位置していた (現在もハイストリート56番地で「グローブ・イン (The Globe Inn)」として営業している) グローブ・タヴァン (The Globe Tavern) の女将ハイスロップ夫人 (Mrs Hyslop) の姪にあたる。バーンズはダンフリースに引っ越しをする前の1790年7月にダンフリース第3歩道建設局に栄転となり、自宅のあるエリスランドとダンフリースの職場を都合18か月にわたり馬で往復していた。そして時々この1610年創業の酒場と宿屋を兼ねたグローブ・タヴァンに宿泊した。1796年4月、ジョージ・トムソン (George Thomson) に宛てた手紙には、「この数年というもの、グローブ・タヴァンは私の行きつけの酒場になっています」(693)³ とある。バーンズが最初にグローブ・タヴァンに言及したのは、1795年8月、ウィリアム・ロリマー (William Lorimer) に宛てた書簡の中で、「昨夜、貴殿を誘うため家に立ち寄りましたが不在だったので、貴殿の大好きな女将の店—ハイスロップ夫人のグローブ—も覗いたのですが、これまた不在でした。今日こそ御一緒に食事を楽しみたいものです」(678)⁴、と女主人の切り盛りで地元ダンフリースにしっかりと根を張っている酒場が登場する。また1795年8月 (或いは9月と推測される)、印刷業者のジェームズ・ジョンソン (James Johnson) 宛ての書簡には、「至急お願いしたい仕事があり、一枚メニュー (宣伝ビラともとれる 訳者) を同封いたしました。お分かりになるとは思いますが、居酒屋のものです。その居酒屋の経営者、ハイスロップは気立てのよい律儀な男で、大変恩義があります。彼のために穏当な条件でこの仕事を引き受けては下さいませんか。何か貴殿にお考えが浮かび、別に装飾を付け足したりなさるのでしたらお知らせあれ。私の考えでは、あまり込み入っていない装飾が適切かと。その居酒屋にはグローブ (地球) という看板が出ています。その名の由来は建物の一番上に地球儀が飾ってあるからです」(684)⁵ とある。バーンズが初めてグローブ・タヴァンを訪れた時期は特定できないが、エアに住むジョン・バラントイン (John Ballantine) に宛てた書簡の最後に「10月25日 ダンフリースのグローブ・インにて」(480)⁶ とあることから、少なくとも1791年10月25日にはグローブ・タヴァンに来ていたことが分かる。

十代を少し過ぎたアンナはグローブ・タヴァンでホステスをしていた。バーンズはダ

3 G. Ross Roy, ed., *The Letters of Robert Burns: Volume II*, by J. De Lancey Ferguson (New York: Oxford UP, 1985) 378.

書簡の引用の後に続く番号はバーンズ書簡分類上の通し番号

4 Roy 365.

5 Roy 370-371.

6 Roy 119.

ンフリースでアンナと関係を持ち、エリスランドに帰ると妻ジーンが待っているという生活を暫く続けることになった。1790年夏にはこれら二人の女性を相次いで妊娠させた。そして1791年3月31日、アンナがエリザベス (Elizabeth) を出産する。妻ジーンは9日後ウィリアム・ニコル・バーンズ (William Nicol Burns) を出産した。アンナは後にエディンバラの大工と結婚した⁷、ともエリザベス出産中、または出産後死亡したとも、リース (Leith) 或いはエディンバラ (Edinburgh) で女中になり、その地で兵士と結婚したとも伝えられている。⁸ バーンズの妻ジーンは自分の子供達と一緒にしないという条件で1794年頃エリザベスを引き取り、彼女が結婚するまで優しく面倒を見た。⁹ 恐らくジーンはバーンズがアンナと浮気をしていることを知っており、当然の結果として夫の5人目にして最後の私生児の行く末を案じていたに違いない。¹⁰

バーンズは「昨晚おれは酒を一杯飲んだ」(*Yestreen I Had a Pint o' Wine*) の中で次のようにアンナを歌っている。

一
 昨晚おれは酒を一杯飲んだ、
 だれも見えない所で。
 昨晚はおれのこの胸の上に
 アンナの金髪の巻き毛がのっていた。
 荒野で飢えたユダヤ人がマナをむさぼった
 その喜びだって何ということない、
 アンナの唇で味わう
 おれの蜜のような至福に比べれば。

二
 あなたがた王たちよ、東と西を取れ、
 インダス川からサバンナまで。
 おれにはしっかりと抱かせてくれ、
 アンナのとろけるような身体を。
 そこでおれは軽蔑してやろう、女帝の権力を、
 皇后を、あるいは回教国の王妃を、

7 Robert Crawford, *The Bard: Robert Burns, A Biography* (Princeton: Princeton UP, 2009) 325-326.

8 Lindsay 279.

ジェイムズ・マッケイ (James A. MacKay) は「アンナは出産時には死亡しなかった。彼女は1794年11月にジョン・グリーンシールドズ (John Greenshields) と結婚した。彼女の死亡記録を確かめる資料はないが、夫が1799年9月に再婚した時には既に死亡していたと考えられる。(バーンズの子を 訳者) 出産時に死亡したことが言い伝えられているのは多分グリーンシールドズとの子の方に関係があるのかもしれない」と自信を持って推測している。James A. MacKay ed., *The Complete Poetical Works of Robert Burns: 1759-1796* (Darvel: Alloway Publishing, 1993) 407. (原詩のテキストとして本書を採用、以後PWと略)

9 Crawford 326.

10 Gerard Carruthers, *Robert Burns* (Devon: Northcote House, 2006) 66.

彼女の腕の中で死ぬほど夢中な喜びを
アンナとおれが交わしているときは。

三

行ってしまえ、おまえ見せつける太陽神よ、
行ってしまえ、おまえ青ざめた月の女神よ。
星よみんな、おまえたちのきらめく光を隠してくれ、
おれとアンナが会うときがきたら。
さあおいで、烏の羽根をまとった夜の闇よ、
太陽も、月も、星もみんな引き下がったいま、
そして天使のペンを持っておいで、
アンナとおれの恍惚を書くために。¹¹

バーンズの女性関係についてハーバード大学のニールソンは、ダンロップ夫人 (Mrs Dunlop) とアンナを例に挙げ、前者とは知的精神的交わりを友人同士のように結び、後者とは束の間の愛を極めて官能的な交わりで結んだ、という趣旨を説明している。¹² ダンロップ夫人はバーンズより29歳も年長であったことを考慮に入れると、恋愛対象との肉体関係を、副次的産物というよりはむしろ第一の目的としていたバーンズにとっては、ダンロップ夫人は当初より恋愛の対極に位置していたと思われる。恋愛対象として付き合い始めるも、遂にその目的を果たせなかったアグネス・クレイグ・マクルホーズ (Agnes Craig McLehose) とアンナを両極に置き、「精神的交わり」と「束の間の愛」を考えてみることもできる。¹³

バーンズはこの作品で旧約聖書の『出エジプト記』第16章の物語¹⁴を引合いに出している。マナの蜜のような味も、目の前のアンナの唇で味わえる喜びに勝ることはない、とは随分大胆な比較である。バーンズは恋愛を成就させた瞬間、それは往々にして肉体関係を結んだことを意味するが、世界も宇宙もこれに勝るものがない、と考えていたようだ。独裁権力者の武力を以てしても今この目の前の愛する女性と結ばれている事実には敵わない、というバーンズの一貫した恋愛の方程式とも言える哲学がこの詩にも現れている。¹⁵

この詩には補追があり、次のように続いている。

11 ロバート・バーンズ研究会編訳『増補改訂版ロバート・バーンズ詩集』（東京：国文社、2009）385-387. 木村正俊氏訳、PW 407-408.

12 William Allan Neilson, *Robert Burns: How to Know Him* (Charleston: BiblioLife, n.d.) 110.

13 拙著“バーンズの書簡”『ロバート・バーンズ：スコットランドの国民詩人』木村正俊、照山顕人編（東京：晶文社、2008）446. に詳述。

14 飢えに苦しむイスラエル人の会衆のつぶやきを聞いた主によりもたらされたパンを、イスラエルの家がマナと名付けた。30節に「コエンドロの種のように、白く、その味は蜜を入れたせんべいのようにであった」（新改訳聖書）とある。

15 Thomas Crawford, *Burns: A Study of the Poems and Songs* (1960; Edinburgh: Oliver&Boid, 1994) 274.

教会と国家は一緒になって、おれに対し
そんなことをしてはいけないと言うかもしれない。
教会と国家は地獄へ落ちるだろう、
そしておれは愛するアンナのもとへ行く。

アンナはおれの目には太陽の光、
彼女なしでは生きられない。
この地上でたった三つの願いが許されるなら、
最初の願いは愛するアンナ。（拙訳）

これは裏返せば、不義を働いていることに対する自分への応援歌ともとれるが、教会と国家を相手に回し神の法と国家の法を敢然と侮蔑した内容を公にするには相当の決意がなければならぬ。クローフォードはこの詩をバーンズの虚像ではなく実像を表現した作品のひとつであると位置付けている。¹⁶ バーンズは「ジョン・ランキンへの書簡詩」(*Epistle of John Rankine*)の中で教会に対する不信感を露わにしていた。¹⁷ 自由な恋愛を制限する教会への痛烈な批判を詩に付することで、如何なる権力の介入も断固拒否するという強いメッセージを読み取ることができる。

2. クローリス

ジーニー (Jeanie)、或いはクローリス (Chloris) として作品に登場するジーン・ロリマー (Jean Lorimer) は1775年、クレイギーバルン (Craigieburn) で生まれた。バーンズよりも16歳年下になる。彼女を歌った作品は24編あり、「クローリス詩群」(Chloris Poems) と分類される。妻と同じ名前だったため作品中で「ジーン」と呼び掛けはしなかったバーンズだが、クローリスという名前はイングランドの宮廷詩人だったチャールズ・セドリー (Sir Charles Sedley) が1688年に世に出した喜劇「マルベリー庭園」(*The Mullberry Garden*) からヒントを得たようだ。1794年9月にバーンズの直属の上司アレクサンダー・フィンドラター (Alexander Findlater) に宛てた書簡で、書を認めた日の午前中、天使に囲まれた気分だと書き綴り、「マルベリー庭園」を引用している。

おお、クローリス、予はただ座るのみ
その時は落ち着きはらって

16 Crawford 274.

17 拙著「1785・86年のバーンズと3人の女性」『成蹊大学一般研究報告第44巻（第3分冊2010年印刷）』（東京：成蹊大学、2011年）3-4.に詳述

おまえの揺籃の美は決して

幸せも痛みももたらしはしない (639)¹⁸

ギリシャ神話で「クローリス」(Χλωρίς)は、春と花の女神で豊穡をもたらす西風の神ゼピュロス(Zephyros)の妻であった。¹⁹バーンズは若くて花のある女性には最適の形容であったと思ったのであろう。ジョージ・トムソンに宛てた書簡で、「クローリス、それは私の創造的靈感を刺激する麗しい女神の詩に歌われる時の名です」(646)²⁰と誇らしげに書いている。

ジーンの父親はケミスホール(Kemmishall)で農場経営とパブの主人をしていた。当時バーンズをはじめとして複数の間接税収税吏²¹がジーンの美貌に魅せられていた。収税吏の一人ジョン・ギレスピー(John Gillespie)もその一人で、バーンズはダンフリースに引っ越しをする前の1791年、エリスランドからギレスピーに「クローリス詩群」の一つを同封した書簡を送っている。詩については後に引用する。

同封した歌は先日会った若くて美しい女性、貴兄にとって大切なお方、ジーン・ロリマー嬢をもとにして作ったものです。彼女はクレイギーバルンの森近くで生まれました。そこは彼女の父上の所有する美しい土地です。「グレイギーバルンの森」という調子の良い古曲がありますが、もしや貴兄が音楽好きなら気に入ると思います。(中略)

なぜ貴兄はエリスランドの友たちにお別れの言葉もなく、行ってしまわれたのですか。我が妻はご立腹で、貴兄が突然旅立ってしまわれたことを謝らない限り、挨拶もしたくないと言っていますよ。

今のところ貴兄のライバルは同僚のルオーズ氏とトムソン氏の二人です。御両人も彼女にぞっこんですが、片思いです。(432)²²

バーンズはジーンを取り巻く3人の男性の中で、唯一ギレスピーに脈があるとみていた。数々の恋愛で女性心理を読み解くことに自信を持っていたはずのバーンズであったが「今回だけは女性の心を読むことに関して間違いを犯してしまった。」²³そしてギレスピーの求愛から逃れんがため、ジーンはモファット(Moffat)の農夫ウエルプデール

18 Roy 312.

19 マッキンタイアは the husband of Zephyr としているが誤解のようである。Ian McIntyre, *Dirt&Deity: A Life of Robert Burns* (1995; London: HarperCollins; London: Flamingo, 1996) 368.

20 Roy 322. (1794年11月)

21 バーンズは1789年9月1日(30歳の時)に収税吏の仕事始めた。

22 Roy 67-68.

23 Lindsay 143.

(Whelpdale)²⁴とグレットナグリーン (Gretna Green) に駆け落ちした。²⁵

ウェルプデールは3週間後、借金取りから逃げるためクロリスを残して去り結婚は破綻した。彼女は仕方なく父親のいるケミスホールに舞い戻り姓を元に戻した。間もなく父親が破産し一家はダンフリースに引っ越し、ジーンはダンフリースに引っ越したバーンズ家に入出入りするようになる。²⁶

バーンズは1793年1月初旬にトムソンに宛てた短い書簡 (532) に2篇の作品、「ガラ川の素敵な若者たち」(*Braw Lads o Galla Water*) と「冷たい貧乏」(*Poortith Cauld*) を同封している。後者は「クロリス詩群」の一つであるが、次のように歌っている

(「アバディーンの冷たいスープ」の曲で)

(コーラス)

ああ、なぜ運命はこんなことをして喜ぶのか、
人生で最も愛しい絆をほどくというような。
またなぜ甘い香りの愛の花も
万金の輝き次第なのか。

ああ、冷たい貧乏と不安な愛、
おまえらおれの平安をおまえらの狭間でかき乱す、
けれどもおれの度量で赦せるのは貧乏だけ。
おれのジーニーは赦せない。

この世界の富をおれが思う時、
この世の誇りと残るすべての他のことを思う時、
愚かな意気地なしを嘆く。
富の奴隷となることを。

あんなに美しい青い目を見れば分かる、
どうやっておれの熱い気持ちに応えるかが。
思慮深さが彼女のいつもの常套句、
彼女は身分としきたりについて話をする。

ああ、誰が思慮深さを考えることができようか、

24 グレットナグリーンはスコットランド南部Dumfries and Galloway州の村でイングランドのCumbria州との境界に位置する。スコットランドでは1856年まで証人の前で結婚の意思を宣言すれば結婚が成立したため駆け落ちカップルが多数駆け込んだ。

25 Alan Bold, *A Burns Companion* (New York: St.Martin's Press, 1991) 44.

26 Lindsay 222.

しかもこんな乙女がそばにいて。
 ああ、誰が思慮深さを考えることができようか、
 おれみたいにこんなに恋をしているのに。

いかに神に祝福されていることか、森に住むインディアンの運命。
 純真な愛しい人に求愛する。
 愚かな化け物、富と地位ですら、
 決して彼を怖気震わせることはできない。²⁷（拙訳）

思い切って一步を踏み出せないバーンズの心持が読み取れるが、数々の過去の不始末を慮って、バーンズは「思慮深く」ならざるを得なかったのであろう。²⁸

1796年7月7日付のアレクサンダー・カニンガム（Alexander Cunningham）に宛てた書簡で、「間接税収税吏は非番の時は給料が50ポンドから35ポンドに減らされます。儉約の名に於いていくら遣り繰りしても、私と妻それに5人の子供を養って、馬一頭を公営馬房で飼っていくのは無理です」（700）²⁹と貧乏所帯を嘆いている。

また、1794年10月にジョージ・トムソン（George Thomson）に宛てた書簡で、

クレイギーバルンの森に歌われている女性はスコットランドで一、二を争う美貌の持ち主です。実のところ（他言無用で願います）ある意味では、彼女と私の関係はスターンの小説のイライザと彼の関係と言えます。友達以上恋人未満とも言えるプラトニックな純朴さを持つ誠実な愛に包まれた関係です。（644）³⁰

とクロリスを絶賛している。そして「クレイギーバルンの森」（*Craigieburn Wood*）でバーンズは次のように彼女を歌った。

（コーラス）

いとしい人よ、あなたのそばに、いとしい人よ、あなたのそばに、
 あなたのそばで寝ることがかなうなら、
 心地よく、ぐっすりと、落ち着いて眠るだろう、
 ベッドの中であなたのそばで寝ている彼は。

クレイギーバルンの森の夕べは甘く優しく暮れ行き、

27 PW 481-482.

28 John Stuart Blackie, *Life of Robert Burns* (1888; London: Walter Scott; n.p.:Kessinger, n.d.) 133.

29 Roy 385.

30 Roy 314.

朝（あした）は陽気に目を覚ます、
クレイギーバルンの森の春の盛りは、
悲しみ以外何も与えてはくれぬ。

草木の葉も、花も
鳥のさえずりも、
楽しみを与えてはくれぬ。
心配で心がかきむしられる。

言えない、言ってはならぬ、
あなたを怒らせるだけだから。
これ以上恋心を隠せば
心が折れてしまいそう。

立ち居は優美で髪は縮れていない、
長身の美しい魅力あふれるあなた、
何とも悶え悩ましい
あなたに拒まれたとしたら。

ほかの男の腕に抱かれているあなたを見ることは、
恋に身悶え思い焦がれることは、
死に等しいということが分かるだろう。
わが心は苦悶で張り裂けるだろう。

でもジーニー、あなたはわたしの女になると言ってくれ、
わたしのほかには誰も愛さないと言ってくれ。
そうすればわたしの今後の人生すべてをかけて、
感謝の気持ちであなたを熱く深く愛するよ。³¹（拙訳）

この詩はギレスピーがジーンに求愛する勢いをつける意図で書かれたことは前述の通りである。³²自分を抑えて同僚との仲を取り持った背景には、若い時分の恋愛に見られた熱情が徐々に消え失せつつあった当時、結婚の失敗で傷ついた若い女性を伝道師のように慰めることで、自らの欲望を埋め合わせる意図が働いたのではないかと思われる。³³

31 PW 436-437.

32 Hogg 291.

33 Blackie 133.

だが伝道師のような振る舞いが長続きするはずもなく、バーンズは自分らしくクローリスに相対する態度を模索し始めるが、結論は最初から分かっていた。バーンズにとっての「自然体」で彼女に接し、詩に歌うことで新たなミューズを崇めていく。しかも新たな方法で。

私は貴兄が我が愛しの女性の物語に、ざっくばらんにそして思いやりを持って興味を抱いて下さることに感謝しています。先の手紙に書きました私の彼女に対する気持ちは、これまでの人生で最も誠実に書き記した内容であると請合います。結婚した夫婦の間の愛は深淵で大いに敬意を払うものです。しかしどうしたものかそういった愛は詩作の過程では異彩を放ちません。むしろ異種の愛が必要です。

「愛が自由、自然が法則であるところでは」(646)³⁴

ここでバーンズはポープ (Alexander Pope) の「エロイザからアベラード」(*Eloisa to Abelard*) の92行目を引用しているが、原詩では「愛が自由、自然が法則であるときは」³⁵である。バーンズが意図的にWhenをWhereに変えたかどうかは分からないが、スコッツ語ではWhenがWhan、WhereがWharとなるため記憶が曖昧であった可能性は排除できない。何れにせよポープの作品を示すことで、エロイーズ (Héloïse d'Argenteuil) とアベラール (Pierre Abélard) の物語を想起させる目的は十分に達成されている。バーンズが5人の女性に5人の私生児を産ませたことは、アベラールがエロイーズの家庭教師をしていた時分に妊娠、出産させたことへ繋がり、アベラールとエロイーズが別々の修道院に入り、その後も往復書簡でのみ「逢瀬」が許されるプラトニックな関係に終始したことは、クローリスに傾けたバーンズの愛情の形に重なる。更に同書簡の中で、「ロスマハのラント (躍動的な踊りの曲 訳者) に合わせた歌詞が完成しました」と「クローリス詩群」の「亜麻色の髪の乙女」(*Lassie wi the Lint-White Locks*) を紹介している。

(コーラス)

亜麻色の髪の乙女、
 美しい乙女、無邪気な乙女、
 一緒に羊の群れの世話をしよう。
 恋人になっておくれよ。

自然は今、草原を花でいっぱいにした。
 すべてが若くてかぐわしい、おまえのように。

34 Roy 322-323.

35 "When love is liberty, and nature, law." 酒井幸三氏訳

おれと一緒に喜びを分かち合わないかい、
そして恋人になると言っておくれ。

サクラソウの土手、うねり流れる小川、
乳白色のサンザシの上に郭公、
早朝の子羊跳ね回る。
大歓迎だよ、恋人になっておくれ。

夏の驟雨が歓迎して、
萎れている小さな花ひとつひとつを元気づける時、
ふたりで行こう、香り立つスイカズラの木陰へ。
蒸し暑い真昼間に、恋しい人よ。

月の女神が銀色の光で照らしてくれる。
羊毛狩りの男疲れ切り家路に向かうとき、
黄色く波打つ牧草地を彷徨しよう。
愛を語るよ、恋しい人よ。

冬の風ヒューヒュー唸り、
乙女の真夜中の眠り妨げるとき、
誠実なわが胸にしっかり抱きしめるよ。
慰めを与えられるように、恋しい人よ。³⁶ (拙訳)

バーンズの詩風の変化が見て取れる。自らが直接相手と触れ合うためにありとあらゆる手段を講じてきた今までの熱い気持ちはすでにそこにはない。一步も二歩も引いて恋しい人を見ているバーンズをホッグは次のように評している、

「クレイギーバルンの森」、「お前は眠っているのか、目覚めているのか」(*Sleep'est Thou, or Wauk'st Thou*)、「亜麻色の髪の乙女」など“クローリス”を歌った作品群は概ね詩人の常套手段として商売用に作った歌詞で、偽りのない情熱が欠けているものであった。バーンズはジーン・ロリマーに出会っていようがいまいが関係なく、沢山の恋愛詩を作るつもりでいた。仮にバーンズがマリア・リデル (*Maria Riddell*) から暫時疎遠になっていなかったら、彼女の名前が歌詞に使われていた可能性が考えられる。³⁷

36 PW 528.

37 Hogg 292.

ホッグの見解にも一理はあろう。バーンズは、その時その場の目の前の女性への熱い思いと欲望を詩作の原動力としてきた。彼はトムソンに、「貴兄は謹厳で碾臼馬のような決まり切った生活を送ることで、人は人生の感動や愛や悦びを抱くとお思いですか。情熱の炎を燃え立たせることができるとお思いですか。哀れを誘うことができるとお思いですか」(644)と修辭的疑問文で聞いている。バーンズの答えは“*No! No!!!*”である。続けて、「詩歌の世界で人並み以上を目指すなら、より神聖な調べに聊かでも近づくことです。天上からの光に浴するため、断食して祈るとお思いですか」と再び修辭的な問いを發し、“*Tout au contraire!*” (全く正反対です)、「私は断食ではなく美しい女性を崇拜し頂く養生法をとります。その女性の魅力の程度が高ければ高いほど、私の詩の喜びを味わうことができます」³⁸と今までの詩作、特にそのほとんどを占める恋愛詩の原動力の燃料となったものが自分を魅了した女性たちであったことを率直に語っている。バーンズにとってはクローリスも有難い存在には違いなかったであろうが、今までのような愛し方がもはや出来なくなってきた。

クローリスは、その後女中奉公や物乞い、売笑などをしながらあてもなくエディンバラを彷徨い、女中頭としての職を全うし、1831年、エディンバラのニューイントン(Newington, Edinburgh)で56年の波乱の人生に幕を閉じた。詩人ジェイムズ・ホッグ(James Hogg)は彼女と出会った当時を思い出し後年、「彼女は落ちぶれてはいたものの色白で均整の取れた立派な体つきをしており、声を聞くと昔は歌で男を酔わせることのできる女性であったことが想像できた。また箱の中にバーンズのひと房の髪をしまっていた」³⁹と書き残している。仮に彼女が髪を毛を入れた箱を持っていたとしても、本当にバーンズの髪であったのか否かを知る術のない今、全て推測の域を出ないが、スコットランドの国民詩人とのプラトニックな関係を全うした人後に落ちぬ人生であった。

終わりに

ダンフリースに来てからのバーンズは、大所帯を養う責務の念と自身の健康への不安に悩みながらも、「クローリス詩群」を中心とする作品を書き続けた。1795年の春にマリアに宛てた書簡で、「私は病で、この哀れなペンをしっかり握ってみずばらしい紙に当てることもほとんどできません」(668)⁴⁰と書いている。持病のリウマチが悪化していた。

もしフランス革命が起きなかったら、バーンズはもう少し長生きをただらう、と歴史を振り返ってみても時間の空費であろう。1794年初頭、フランス軍によるブリテン島侵略の危険性が高まると、バーンズはそれまでの親フランスの態度を改めダンフ

38 Roy 316.

39 McIntyre 368.

40 Roy 354.

リース義勇軍 (the Dumfries Volunteers) に参加し、編成過程で顕著な役割を演じた。彼は仲間の兵士たちと共に堂々として行進し、また祖国を鼓舞する詩を書いた。「傲慢なフランス人の侵略の脅威があるか」 (*Does Haughty Gaul Invasion Threat?*) は1795年3月に書かれた可能性が高く、5月には複数の新聞に掲載されている。「コルシンコン」 (Corsincon) と「クリフェル」 (Criffel) は共に小山で前者はエアシャー (Ayrshire) の州境にあり後者はニス川 (the Nith) の入り江のステュアトリー (Stewartry) 側にある。

傲慢なフランス人の侵略の脅威があるか。

それならそのろくでなしどもに教えてやれ、
私たちの海には軍艦が壁のように立ちはだかっている。

そして義勇兵たちが海岸を守っている。
ニス川はコルシンコンまで流れ

クリフェルはソルウェイ湾の入り江に沈む。
敵兵がブリテンの地に、
結集するのを許す前に。

ああ、歯をむき出して喧嘩する犬のように、
吠え争って仲間割れしないように、
バシッと平手打ち、間抜けなろくでなし、間に割って入って、
棍棒で決着をつけるまで。
ブリテンの人々が今でもブリテンに忠実なら、
我々みんなで団結せよ。
ブリテン人の手によってのみ、
ブリテンになされた権利侵害は正されるのだ。

教会と国の湯沸し釜、
多分補修が必要だけど、
絶対に外国の鋳掛屋の阿呆どもには、
釘一本打たせない。
我々が祖先の血がその釜を買った。
生意気にも誰がそれを駄目にしようか。
天に誓って、神を冒瀆する見下げた奴は、
釜を焚く薪の代わりにしてやる。

圧制者を認める浅ましい奴、
 恥知らず、奴の義兄弟は、
 民を玉座の上に据えようとする。
 奴らが共に地獄に落ちますように。
 「国王陛下万歳」を歌わない奴は、
 教会の尖塔で吊るしてやる。
 「国王万歳」を歌っている間、
 我々は国民を決して忘れない。⁴¹（拙訳）

バーンズがスコットランドの国民詩人として愛され続けてきた理由の一つは、彼の高邁な愛国心である。健康が優れないとして、理想の女性に心身を捧げることを諦めても、祖国に捧げる思いは萎えることがなかった。この義勇兵参加によりバーンズの体は著しく損なわれた。生活のため収税吏の仕事を休むわけにはいかない。⁴² 肉体の酷使が続いた。

1796年1月、友人のロバート・クレイグホーン（Robert Cleghorn）への書簡で、「お別れして以来、私は災難の申し子になってしまいました。一人娘、最愛のわが子を失ってからまだ立ち直ることができません。持病のリウマチ熱の完全な餌食になってしまいました。おかげで私は墓場の入り口に立っています。病床で数週間過ごし、やっと這って歩き始めたところです」（687）⁴³ と苦悩を語っている。1790年、31歳のバーンズが、頭痛と鬱状態に悩みながら週320キロメートルの道のりを、馬を飛ばして自宅と職場を往復したことが彼の健康を著しく害した。もはやバーンズには、それまで経験してきた恋愛の形に耐え得る体力は残っていなかったと考えられ、それは即ち恋愛詩の詩想の変化に繋がる。

バーンズの病状が極度に悪化した人生最後の六か月、彼の恋愛詩の最後のヒロインとなったのは向かいの家に住む18歳のジェシー・ルウォーズ（Jessy Lewars）であった。病床でバーンズが、看護をしてくれていた彼女との恋愛を想像し書いたのが「ああ、もし君が寒風に吹かれているのなら」（*O, Wert Thou in the Cauld Blast*）である。

ああ、もし君が寒風に吹かれているのなら、
 向こうの草地で、向こうの草地で、
 怒っている風に私の肩かけを広げ、
 かばってあげよう、かばってあげよう。
 不運のはげしい嵐が

41 PW 537-538.

42 Hugh Douglas, *Robert Burns: The Tinder Heart* (Gloucestershire: Allan Sutton, 1996) 259.

43 Roy 373-374.

君のまわりに吹いたなら、君のまわりに吹いたなら、
私の胸をおまえのかくれがにして、
二人で何でも耐え忍ぼう、二人で何でも耐え忍ぼう。

たとえ私がどんなに寂れた荒地にいても、
真っ黒で不毛の、真っ黒で不毛の、
その荒地さえ楽園になる、
君がそこにいてくれたら、君がそこにいてくれたら。
また私が世界の王として
君とともに治めるなら、君とともに治めるなら、
私の王冠の最高に輝く宝石は
私のお妃であろう、私のお妃であろう。⁴⁴

当然のことながらジェシーとはクロリス以上にプラトニックな関係であった。⁴⁵ 作品前半を覆う庇護者としての態度が痛々しくも思えるが、甲斐甲斐しくバーンズの世話をしてくれるジェシーへの愛情が素直な気持ちで表現されている秀作である。同じ屋根の下で妻ジーンは7人目の子供を妊娠中であり、妻として夫に出来る最後の仕事は無事子供を出産することであった。ジーンはバーンズが亡くなった4日後の1796年7月25日、第7子マックスウェル (Maxwell) を産むことで妻としての務めを立派に果たしている。夫の詩作の原動力となった数々の女性との恋愛に悩みながらも、最後の最後までバーンズに自由な恋愛させた実に天晴れな妻であった。

経済学部非常勤講師

2012年10月20日

推薦者：経済学部教授 近藤 正

44 『増補改訂版ロバート・バーンズ詩集』457-458. 木村正俊氏訳
PW 567-568.

45 Catherine Carswell, *The Life of Robert Burns* (1930; n.p.: Wm.Collins&Sons; Edinburgh: Canongate, 1996) 373.

PRINTED BY
SEIKO-SHA CO. LTD.
1-5-15, NISHITSUTSUJIGAOKA, CHOFU-SHI, TOKYO

Seikei University
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,
Tokyo, 180-8633 Japan